

Voice of friends NEWSLETTER

フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー ニュースレター
ボイス オブ フレンズ vol.38

contents

- ラオ・フレンズ小児病院近況報告
- ラオ・フレンズ小児病院のラオス人看護師来日
- 赤尾和美看護師『今月の出来事』から
- カンボジア／ミャンマー活動報告
- ラオスを知ろう〜ルアンパバーン・ハーフマラソン

©Yumiko Izu

ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の近況をお伝えします。

外来患者数のべ8,000人突破

▼外来のようす。
診察を受ける前に、看護師が状態をチェックします

今年の2月11日にラオ・フレンズ小児病院（LFHC）が開院してから、あっという間に10ヶ月が経過しました。準備に抜かりはなかったか、訓練通りの処置や対応ができるか、想定外の事態に振り回されたりしないか……等々、不安や緊張を抱えながらのスタートでしたが、順調に診療活動が営まれています。

それを物語っているのが、来院者数の推移です。開院から半年で、のべ8,000人以上の子どもたちを診療しました。

開院の日。小児科を受診するため隣接する県立病院を訪れた子どもとその家族は、「今日からはお隣りの小児病院に行ってくださいね」と案内され、渡り廊下を歩いてLFHCにやってきました。病院スタッフも緊張していますが、患者さんも負けず劣らずドキドキしたはず。「何やら勝手が違うけれど、大丈夫？ここは安心できる場所なの？」と思われても仕方ありません。想像もしていない場所に通されてしまったのですから。しかし、できたばかりの待合室で、看護師が優しく声をかけ、病状などを聞き取るうち、どの家族も、だんだんリラックスするようでした。開院初日に訪れた患者さんは、47人。LFHCの歴史の幕を開けた、最初の47人です。

来院患者数は、それから右肩上がりです。LFHC開院前の県立病院小児科患者数と比較しても、増加しているとのこと。これは、少しずつではあるけれど着実に地域に根付き、信頼を得ているということだ、と認識しています。口コミの力が強いラオスで、「新しくできたLFHCは良い病院だよ」と評判になっていると見てよいのではないのでしょうか。なぜなら、自分の子どもに接するように慈しみながら、質の高い医療を提供するLFHCのスタイルは、必ずやラオスの人々に受け入れられるものと信じているからです。

また、LFHCの認知度が上がっていることは、リクルートの面からも推察できます。患者数の増加や業務の拡大に伴い、その都度必要に応じて新スタッフの求人募集を行っていますが、開院前とは比べものにならないほどの応募があるのです。現在、LFHCでは、ボランティアも含め約60人のスタッフ

が働いています。

さて、来院患者の病気の内訳ですが、栄養失調、下痢、肺炎、マラリアなどが多く見受けられます。きちんと薬を飲むことを重視しない親御さんや、栄養・衛生などの健康教育が必要な患者さん家族が多く、指導や説明に苦労する場面も多々あるようです。



▲病院マスコット・ジャイディーのぬいぐるみで、不安がる子どもをなごませます

入院病棟と救急治療室がオープン

開院以降、段階的に院内活動を広げていく計画に基づき、まずは外来のみをスタートさせていましたが、8月11日、ついに入院病棟もオープンしました。入院患者を受け入れるとなると、これまでとは違った患者家族への対応や、スタッフの勤務シフトなど、新たに取り組むべきことも増えてきます。入院病棟は最終的に24床を見込んでいますが、現段階では6床を基本とし、10床を超えないように設定しています。

入院病棟に次いで、11月23日には救急治療室もオープン。外部の小児救命救急医による医師と看護師への教育を行い、態勢を整えました。

救急と入院病棟で連携を取ることで、また一歩進んだ医療が提供できると期待しています。



▲入院患者とその家族。ラオスでは、家族も入院に付き添います

日本の企業から技術者を派遣していただきました。

LFHC 院内の IT 基盤整備を行うため、4～6月まで、(株)NTT データの IT エンジニアを現地に派遣していただきました。

これは、NPO 法人クロスフィールズが行っている【留職プログラム】を通じて実現したものです。【留職プログラム】では、企業で働く人材を新興国の NPO などに派遣し、一定期間、本業で培ったスキルを活かして課題に取り組みます。クロスフィールズは、人材を必要としている新興国側の団体と、そのスキルを持つ企業とをマッチングし、企画・コーディネートとサポートを担当してくれるのです。

このたび、フレンズ JAPAN からクロスフィールズに LFHC の IT 整備について相談し、今回のプログラムが実

現しました。協力して下さることになった(株)NTT データでは、このプログラムにチャレンジしたい人を社内で募集し、厳しい選考を経て佐藤広明さんを選出。佐藤さんには、約 3 ヶ月間に渡って LFHC に勤務していただきました。

プログラムを終えて帰国した佐藤さんから、「ラオスでの生活や LFHC スタッフとの交流が思いのほかスムーズにいったこともあり、とても楽しく過ごすことができました。業務の面では難しいと思えることにもたくさんぶつかったが、よい経験になり、また確かな実績を残す事ができたので、とても充実していた」といった感想をうかがうことができました。

ご協力いただいた各方面の皆さまに、感謝申し上げます。

LFHCのケオ看護師が来日しました。

10月3日～8日、LFHC スタッフのケオ看護師が来日し、フレンズ JAPAN の業務を体験しました。

「非営利団体がどのようにして活動資金を得ているか、ご支援いただいている方々へのお礼、イベントでの広報活動、事務局内での事務作業など、日々のフレンズ JAPAN の活動やお金のあり方を、LFHC スタッフに実際に見て学んでほしい。自分たちの給与はどこから来ているのか？欲しい物がすぐに購入できないのはなぜか？身を持って理解してほしい」といったことが以前から話し合われていましたが、経費やその他の問題で、なかなか実現できないでいました。

しかし、非営利団体のあり方を理解し、実感してもらうことはとても大切なことです。アンコール小児病院での経験からも、現場のスタッフに対し、早い段階から啓発していくことが重要と思われました。そこで、ご支援者へのお礼訪問やイベントが予定されている時期に合わせ、現場スタッフの1人を日本に招聘することにしました。来日経費を抑えるため、急きょホームステイ先を探したり、入国書類を揃えたりと大変でしたが、何とか受け入れ準備ができました。

LFHC では希望者を募って論文提出と面接による選考

を行い、その結果選出されたのがケオ看護師です。ケオ看護師は、かつて日本で看護研修を受けたことがあり、日本語も話すことができます。滞在中、予定されていたご支援者へのごあいさつ、グローバルフェスタでの広報活動、駐日ラオス大使館訪問、事務局内の作業をこなし、10月5日には、自身の報告会として、集まってくれた支援者の方々に前に、ラオスと LFHC の紹介を日本語で行いました。

ケオ看護師には、日本で感じたこと、学んだことを他スタッフにも共有し、啓発を行う側に立ってくださることを期待しています。また、今後も、こうした機会を継続して持てたらいいと考えています。



◀ラオス大使館で、一等書記官にLFHCの活動を紹介

▶報告会では、日本語でのプレゼンテーションにも挑戦



▶左からナース、ドクター、薬剤師



▶ハウスキーパーさん



▶セキュリティさん



待ちに待ったユニフォームが届きました。ネイビーブルーがドクター、グリーンがナース、ライトブルーが検査技師・薬剤師・レントゲン科で、ハウスキーパーさんはパープル。セキュリティさんはお決まりのタイプですが、ブルートップ。受付、管財課などはロゴ入りシャツです。村へ出向くアウトリーチは、ロゴシャツでもユニフォームでもOK! こうしてユニフォームが決まると、プロフェッショナルな印象になりますね。スタッフたちの動きも、心持ちデキパキ。いいですね。

ラオス人男性スタッフは料理上手です。といっても、この写真は自分のご飯を作っているのではないですよ。栄養失調の患者さん用に、高たんぱく高カロリーの“ふりかけ”を調理中です。ピーナツ、緑豆、大豆をこんがり茶色になるまでカラカラに炒り続け、その後石臼で打って、さらにもう一度炒り、パラパラになったら出来上がり! これをスープに入れるもよし、もち米に付けるもよし。香ばしい香りが漂い、見物人も増えてきたので、試食をしてもらいました。「んー、まずまずうまい」って言っていました(笑)

〈ラオス 3~4 月の出来事より〉



▲お得意顔!



▲炒って、炒って~!



▲5kgしかなかった T ちゃん(左)が8kgになって、ふっくら(右)



ルアンパバーンの北にあるンゴイ郡の病院から、「管轄内に重症な栄養失調の子がいる。LFHCには訪問看護のプログラムがあると聞いたので、フォローアップをしてもらいたい」と連絡が入りました。ちょうど、その地域に別の患者さんがいたので立ち寄ったところ、ぽつんと無表情で床に座っているガリガリの女の子(?...かどうかとも分からなかった)がいました。体重を計ろうと抱っこすると明らかに高熱。それに体重はたった5.5キロ。この年齢なら10キロ以上あるはずなのに。すぐに解熱剤を服用させて、そのまま病院へ直行+即入院。この家族は、T ちゃんを含め3人の子ともお爺ちゃん、お婆ちゃんの7人家族です。そして、お母さんは妊娠中(何か月なのか不明...だけど、もうじきだなど思うくらい大きなおなか!)。主にお爺ちゃんとお婆ちゃんがお米を作って生計を立てていますが、ご両親は、どちらも理解力が弱いのか社会性に欠けているのか、なかなか会話が成り立たないんです。また、料理をしたことがないらしく、食料を提供しても作ることができない。これまでどうやってきたんだろう…。T ちゃん以外の子たちがこ

れまで生きてきたことが不思議なくらい。入院中に生活習慣を身に付けてもらわなくちゃと、火の起こし方、料理の仕方、栄養のある食べ物の食べさせ方、手の洗い方、水浴びの仕方、洗濯の仕方…と色々と一緒にやりました。2か月に渡る院内の生活で、T ちゃんはふっくらとして、にっこりするようにもなってきました。そこで気になっていたのはお母さんの出産。T ちゃん一家の民族は、風習として出産は妊婦さん一人でするのが基本なのだそうです。妊産婦検診をいくら勧めても、頑なに行かないと言っていたのです。ですから、自宅での出産のこともかなり気になっていたところで、そんな折りになんと! タイミングよく入院中にお母さんが院内で出産をしてくれたので、新生児のお世話も指導ができました。ヘビースモーカーのご両親への指導も大変だったな。でも、なんとか禁煙の決意もしてくれました(いつまで続くかは疑問ですけど)。T ちゃんの体重も9キロになり、色々あった病気も完治して無事退院の日を迎えることができました。今後は、T ちゃんを紹介してきた病院との連携プレイです。地元で頻繁にフォローをしてもらい、LFHCでは月に1度のフォローをすることにしました。この状態がずっと継続されるよう、地域の連携システム作りには力をいれなければなりませんね! 〈ラオス 5~6 月の出来事より〉



◀お父さんにも頑張ってもらいました



▲「えっと...、どこだ??」



▲「難しい～」と練習中

入院病棟のオープンと共に開始したのが、ipadを使ったEMRシステム（Electric Medical Record 電子カルテ）です。これも新たな経験です。ひとつクリックするごとに、「あ!…」という声があちらこちらから（笑）IT世代の若いローカルスタッフは慣れるのも早いかもしれませんが、今は四苦八苦。各項目の英語をまずは覚えなくてはならず、ひとつずつ手書きで写

して、辞書で調べているスタッフもありました。まだ病院の活動すべてをこのEMRで把握することはできないのですが、いずれは、全てのデータが揃うようになる予定です。

アウトリーチでは、コミュニティーを対象にした予防教育のための活動が始動しました。“ヘルスプロモーションデー”とネーミングし、村での健康に対する意識を高め、健康を害する

© Adri Berger



▲ハイポーズ!!みんな笑顔! 行動を変容し、維持することを目的としたヘルスイベントです。今回初めて試験的に開催してみました。2月から、保健局や公衆衛生課との話し合い、村と管轄郡病院との話し合いを重ね、実現に至ったものです。最初は対象をひとつの村にして、その村をモデル村に仕上げるのが第11段階の目標です。どこの村にするかは、各村の村長さんや女性連合代表、

コミュニティーリーダー、郡病院の代表から聞き取り調査をして検討し、N村を第1号モデル村と決定しました。皆やる気満々です。「ほかの村へはいろんなプロジェクトが来ていると聞いていたけど、この村は素通り。健康の向上を」したいけど、どうすればいいのかわからず、ぜひ協力してほしい」と青年会の代表が語ってくれたことが大きな決め手でした。ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）が主導権を取るのではなく、村人・郡病院スタッフが掲げた目標を達成するために、アドバイス、手法の提供をする役割が私たち。あくまでも村人主導の活動で進行します。N村がモデル村になれば、周辺の村からも代表者を招聘し、次のモデル村の立候補を募る予定です。最初の“ヘルスプロモーションデー”では、①子どもの予防注射②身体測定と成長の指標記録③妊産婦検診④健康教育（栄養・母乳の効用・発達段階）⑤クッキングデモンストレーション（離乳食）を行いました。最初のことから前日から予行演習をしていたとはいえ、「あれがない!」「〇〇どこ行った～?」と大騒ぎ（笑）。それでも、48名の子どもたちが無事に身体測定も終え、最後はみんなで記念写真! 今後は改善継続してヘルスプロモーションを開催し、村の公共資金を集めるために、オーガニック野菜ガーデンを作ることも計画中です。



▲アチアチ!...美味しい!



▲初めて聞く栄養のお話を真剣に聞く子どもたち

は改善継続してヘルスプロモーションを開催し、村の公共資金を集めるために、オーガニック野菜ガーデンを作ることも計画中です。

〈ラオス7～8月の出来事より〉



赤尾和美看護師の 「今月の出来事」から



▲街の中はカラフル～

ばと準備万端、眺めの良いレストランを予約したのですが、今年は個々の家庭がどんなことしているのかしら?? ということにテーマを絞り、ある

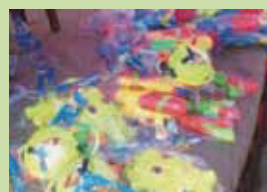
さて、今回のラオスあれこれは、Pi Mai Lao（ラオス正月）です。昨年とはとにかく初めてのラオス正月だったので、メインイベントのパレードを撮らね



▲道のはずが川に変貌

ご家庭の新年パーティーにお呼ばれしました。そして、今年も『水!水!水!』です。

〈ラオス3～4月の出来事より〉



▲お子ちゃまたちもドボン、ドボン!

◀水鉄砲屋さんは大繁盛



▲私もドボン!

カンボジア／チャリティーイベント 【環境と子どもの健康のためのサイクリング】が行われました。



▲参加者約400人！壮観です。

2013年に自立を果たしたアンコール小児病院（AHC）は、運営資金を得るため、多方面への支援の呼びかけやチャリティーイベントな

どに積極的に取り組んでいます。そのひとつ、昨年8月に開催された【環境と子どもの健康のためのサイクリング】をご紹介します。

このチャリティーイベントは、収益をAHCに寄付する事を目的に、カンボジア・サイクリングとアジア・スクエア・グループ（カンボジアの外食産業グループ）による主催で行われました。

イベントでは、参加者全員に使い捨ての手袋とゴミ袋が配られ、まずはシェムリアップ市街のゴミ拾い。その後、主催者が準備したマウンテンバイクとヘルメットを装備してサイクリングへ。主催者のレストランから提供された食事や、ゲーム、抽選会などもあり、イベント参加者は400人にも上りました。楽しみながらチャリティーができるということで、大好評だったようです。

イベント終了後、AHCビジターセンターで、

主催者の皆さまから7,500ドル（当時のレートで約83万円）の支援金贈呈が行われました。



ミャンマー／モバイルクリニックを実施しています。

フレンズ JAPAN が支援している現地の NGO「ゴールドマンマー」の調査により、今年度は、ヤンゴン管区ダラ郡にあるカナウン周辺の村で、モバイルクリニックを実施しています。この地区は、川を含む地理的な状況から政府サービスが行き届きにくく、医療機器も少ない上、資格のない医師を頼りにするような環境です。

8月、9月、10月に、6回に渡って、モバイルクリニックや健康保健教育、栄養教育等を実施。モバイルクリニックでは、16歳未満の子どもたちをミャンマー人医師が診察し、必要に応じて治療を施しました。母親たちに対しては、3種類の栄養群を教え、栄養バランスの取れたメニューとして鶏粥の作り方を実演しながら講義を行った後、参加者に試食してもらいました。

こうした講義は初体験だったそうで、参加者からとても感謝された、との報告を受けていますが、問題点や反省点をあぶり出しながら、次の活動に活かしたいと思います。



▲実施日には多くの親子が集います。

活動報告

ラオスフェスティバル2015 5月23日～24日 東京・代々木公園

通常は1年おきに開催されているラオスフェスティバルですが、今年はラオスと日本の外交関係樹立60周年ということで、昨年に引き続き特別開催されました。



▲フレンズブースは緑のバナーが目印。

好天だったこともあって大勢の来場者があり、フレンズのブースでは2日分の配布資料が1日でなくなるほどの盛況ぶりでした。

K・MoPAチャリティ・ライブ2015 9月12日 山梨・清里フォトアートミュージアム

毎年恒例のチャリティ・ライブを、今年も開催してくださいました。今年のテーマは『いのちの響きをつむいで』。ピアノのウォン・ウィンツァンさんと、ボーカルの鈴木重子さんがつ

むぐ美しい音楽が清里の森を包み込み、心まで満たされる極上のひとときでした。

▶美しく澄んだ演奏にうっとり。

写真提供：清里フォトアートミュージアム



グローバルフェスタJAPAN2015 10月3日～4日 東京・お台場センタープロムナード

25回目を迎えた今年のグローバルフェスタ。これまでの日比谷から、お台場に場所を移しての開催となりました。主催者発表では、来場者は2日間で約10万1,300人。フレンズのブースにも、多くの方にお立ち寄りいただきました。

ラオ・フレンズ小児病院看護師による活動報告会 10月6日 東京・レストランバー-sibafu

ラオスから来日したケオ看護師と赤尾看護師とが、ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の活動状況について報告会を行いました。練習を重ねた日本語で報告を終えたケオ看護師には、大きな拍手が。平日の開催でしたが、たくさんの方がご参加くださり、活発な質疑応答もあって、内容の濃い報告会となりました。

皆さまのご支援がLFHCを動かします。

ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）は、ご支援いただいている皆さまからの年会費やご寄付、各種助成金で運営費を賄っています。ラオスの医療行政や保険制度、一般的な国民の経済状況等を合わせて考慮した結果、現在、LFHC では診療費をいただいております。

無償とは言え、LFHC では、質の高い、心のこもった医療を提供することに迷いはありません。それがフレンズの理念だからです。しかし、そのためには、皆さまのご理解とご支援が欠かせません。実際、皆さまのご支援のおかげで、実に多くの命が救われています。

- * 3,000 円で、1 人の患者が入院病棟で一晩治療が受けられます。
 - * 6,000 円で、50 人の医療スタッフが研修を受けられます。
 - * 9,000 円で、外来患者に 1 日分の薬を処方できます。
 - * 12,000 円で、訪問看護を受けている 75 人の患者に食料の援助ができます。
 - * 30,000 円で、1 人の未熟児が新生児室で 1 日治療が受けられます。
 - * 60,000 円で、10 個の聴診器をスタッフに支給できます。
 - * 120,000 円で、栄養失調児を 1 ヶ月間治療することができます。
 - * 240,000 円で、45 人の入院患者を 1 日治療することができます。
 - * 780,000 円で、1 人の看護師を 1 年間雇用することができます。
- ※1 ドル=120 円で円に換算

東南アジアの近隣諸国と比較すると、ラオスは物価が高いと言われていますが、日本と比較すれば、かなり安い印象を受けます。例を挙げると、600ml のミネラルウォーターが、日本円に換算すると 40~50 円ほど。350ml のビールは 100 円程度です。にもかかわらず、医療器具や医療備品は近隣諸国から輸入しなければならない事情からか、日本より高額になることが少なくありません。つまり、医療にかかるお金は、本来、ラオスではとても高額だということです。

より多くの子どもたちの健康のためには、現実問題として、大きな運営資金が必要となります。今後とも引き続き、あたたいご支援とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。



©Geoff Ridenour

アジアの子どもたちを支援する フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN に皆さまのご協力をお願いいたします。

ご支援の方法をお選びいただけます。

- 一般賛助会員 : 年会費 1 口 6,000 円
- 学生賛助会員 : 年会費 1 口 3,000 円
- 一般寄付 : 金額・回数はご自由です

支援者には年2回発行のニュースレターをお送りするほか、報告会やイベントの案内などをお届けします。

- 正会員 : 年会費 個人 12,000 円
団体・法人 30,000 円

正会員には、ニュースレターや報告会・イベントの案内などをお送りするほか、年 1 回の定時総会において、団体の意思決定について参加していただけます（委任状の提出も可能です）。

※正会員は、当法人が定める入会申込書を別途ご提出ください。

ご寄付を希望される方には、専用の郵便口座の振込用紙をお送りしております。ホームページのフォーム、もしくはお電話でご請求ください。郵便局や銀行に備え付けの用紙を使っていただいてもかまいません。

● 郵便口座

加入者名：特定非営利活動法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
振替番号：00160-0-546217

● 銀行口座

銀行名：三菱東京UFJ銀行 中目黒支店
口座番号：普通預金 0420041
口座名：トクヒ) フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN

● クレジット決済

ご自宅からインターネットを通じ、クレジットカードでご寄付ができます。フレンズ JAPAN のホームページ www.fwab.jp にアクセスし、手順に沿ってお手続きください。

※ご寄付には寄付金控除の可能な領収証を発行いたします。

※銀行からのお振込みや、ご自身の郵便口座より郵便振替で直接送金される場合、お手数ですが別途メールかお電話で、お名前、郵便番号、ご住所をお知らせください。

※アンコール小児病院（カンボジア）に限定したご支援をご希望される方は、その旨を事務局までお知らせください。（振込用紙使用の場合はカンボジア寄付とご記入ください）

ラオスを知ろう

ルアンパバーン・ハーフマラソン

世界文化遺産の街・ルアンパバーンを走るマラソン大会が2013年より毎年開催されており、10月の風物詩として定着してきたようです。知名度が上がり、第3回となった今年の大会では、国内のみならず、タイやベトナムなどの近隣諸国をはじめ、世界34カ国からの参加者がありました。その数、約500名。今年は日本人の参加者もたくさん見受けられ、距離で分かれた各コースで、男女共に日本人が上位入賞を勝ち取る活躍ぶりでした。また、新設されたリレー部門では、ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)スタッフチームが見事優勝！この日に向けてトレーニングを続けた成果が最大限に現れ、スタッフ一同、大喜びです。

このマラソン大会はチャリティーのために始められたもので、昨年からは、LFHCが支援先のひとつになっています。

参加者の中にはチャリティーとは知らずに参加を決めたランナーも多かったそうですが、チャリティーとわかり、「それなら、ますます参加できてよかった」「自分が楽しく走ったことが子どもたちのためになるなんて、一石二鳥だ」といった感想も聞かれたとのこと。



▶日本人参加者も増え、各部門で上位を奪う快進撃を見せました



アカウンタビリティ・セルフチェック 2012を実施しました

事務局より

アカウンタビリティとは「団体としての社会的責任を果たし、その活動の内容や成果、今後の活動などを説明できること」を意味します。社会から信頼される団体となるためには、常にアカウンタビリティの向上を意識しなくてはなりません。

このオレンジ色のマークに見覚えはありませんか？
NGOを対象とした診断ツール【アカウンタビリティ・セル

フチェック】を実施した団体にのみ付与されるマークで、フレンズJAPANのwebページ等にも掲載しています。

これまでの2008バージョンから2012バージョンへと刷新されたため、このたび新たに【アカウンタビリティ・セルフチェック2012】を実施し、新マークを取得しました。これからも、信頼される団体であるために、健全な組織運営を心がけてまいります。


FRIENDS
WITHOUT A BORDER

www.fwab.jp

認定NPO法人
フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN
〒153-0064 東京都目黒区下目黒 1-7-5-203
Tel / Fax : 03-6421-7903
friends@fwab.jp

Friends Without A Border
1123 Broadway, Suite 1210
New York, NY 10010 USA
Tel : 212-691-0909
Fax : 212-337-8052

Lao Friends Hospital for Children
Nasang Road, Phoumork Village,
Luang Prabang district,
Luang Prabang province Lao PDR